

大学生のボランティア体験を通して

河西 由美子

本原稿の執筆中にまたもや九州地方で大きな地震が発生した。おみまいを申しあげるとともに学校図書館にかかわるものとしてお役に立てることがあれば願っている。

筆者は、昨年10月の新潟中越地震の直後、学校図書館関係メーリングリスト“sl-shock”を通じて知った現地の学校図書館の被災状況に衝撃を受け、11月に現地を訪れた。その後玉川大学の司書教諭関係科目の授業内で現地の事情を紹介したところ、20名ほどの学生からボランティアの志願があった。とはいえ、座学で学校図書館について学んだだけの大学生たちであり、突出したスキルや知識があるわけではない。受け入れ側の需要と学生が貢献できる作業内容のマッチングについては慎重な調整を必要とした。

慶應義塾普通部司書教諭の庭井史絵氏のご尽力により、1か月ほどの調整・準備期間を経て、整理作業の需要がある受け入れ校との調整がまとまった。学生の旅費負担軽減のため当初は小型バスの貸し切りを予定していたが、その後メーリングリストを通じて一般からも続々と志願者が集まり、現地が雪の季節を迎える直前の12月中旬の日曜日、50人乗り（！）の大型バスで東京を出発した。参加者の内訳は、学生14名のほか、市川市をはじめとする千葉県内の学校図書館関係者の方々15名、他地域からの参加者、ストーリーテリングの実践家、研究者など16名である。加えて現地では、小千谷高校司書の熊木寛子氏を中

心とする新潟県内のボランティアの方々が合流された。

受け入れ校となった川口町の田麦山小学校は、震災後、学校図書館が仮設診療所として使われていたため、学校側からは、まず診療所がひきあげた後の本格的な図書館改修の要望があった。山中で、雪の多い地域であることから、子どもたちの憩いの場となるようにとの希望にこたえるため、書架の配置変え、背ラベルの貼(は)りかえ、展示やサインの作成、書誌データの入力などを5時間（東京からの日帰りの行程のためのぎりぎりの実働時間）で行った。震災時に寄付された未整理の本についても書誌データを入力し、ラベル等を装備し配架した。参加者のうちストーリーテリングの実践家によるおはなし会も午後2回開催され、日曜日の学校に多くの子どもたちがおはなしを聴きに來てくれた。

作業場となった視聴覚室は1つの空間に上記の複数の作業を行うグループが混在し、参



サイン作成中の大学生

加者のほとんどが初顔合わせの即席グループであったにもかかわらず、NDCや著者記号の表記などをめぐる専門用語を共通言語として、迅速かつ的確な問いと回答、指示が飛び交い、極めて専門性の高い空間と化した。学生たちは緊迫した空気に圧倒されつつも、実践現場に居合わせるという興奮を感じている様子であった。帰りの車中で感想を聞いてみると「授業を受けてなんとなく学校図書館の仕事についてわかったつもりでいたけれど、あれがプロの技ならば自分にはとてもなれそうもない」という逆・教育的効果(!)と思われる意見もあったが、実践家の豊富な経験と深い知識、それらが発揮される際のパワーやスピードをまのあたりにし、畏敬(いけい)の念を覚えるとともに、学校図書館の業務の多様さや奥の深さに感銘を受けていた様子であった。



専門用語飛び交う空間

複数の専門家が集い、高い専門知を共有して行う質の高い実践や、徒弟的な環境における実践的な学びは、実は平時の学校図書館専門職にとっても必要であり、有益であるはずである。日本の学校図書館の多くは「ひとり職場」(one-person library)であり、その必要性や専門性について所属するコミュニティ(学校)内での理解や評価が与えられることは稀(まれ)である(なんと不健康な環境であることか!)。今回参加されたボランティアの中でも特に市川市の学校図書館関係の方々の活躍がめざましかったのも、市川市が地域ネットワークという枠組みの中に学校司書や学校図書館

員が共存するという共同体的な構造を有していることが大きかったのではないかと考える。

学校図書館専門職の専門性を閉じたものとしないうちにも、学校内はもとより、利用者である児童生徒とその父母・教職員を通じて、その専門性や重要度が地域社会の中で認知されていくようなしかけ(パートナーシップの構築)やアピールは平時より行われるべきである。では一体それをだれがどうやって行うのか?

実は今回の我々のボランティア活動について、①既存の学校図書館関係団体や、②総合的なボランティア団体が活動主体となっていない点について図書館関係者からは批判的意見や冷遇の対応も受けている。しかし上記が至当な批判と思えないのは、①については、既存組織経由ではボランティアや支援の動きが見られなかったこと、②については、平時より認知度が低く予算規模も小さい校内施設である学校図書館が被災した場合、その支援が社会一般の支援からとりこぼされる可能性が高いという推測が容易に成り立つからである。折しもスマトラ沖地震による津波で被災した当該地域の図書館に関してはいち早くユネスコが声明を発表し、IBBY、JBBYによる支援の呼びかけも始まっている。日本国内においても将来を見据えた建設的な議論がなされるべきである。そしてそれはとりまなおさず、平時の学校図書館への現実的で有効な支援とそのための社会へのアピールを考えることであるはずである。

最後に、受け入れ校としてさまざまな配慮をしてくださった田麦山小学校のみなさま、学生と活動を共にしてくださり導いてくださった参加者のみなさま、我々のし残した作業を引き取りしあげてくださった熊木寛子氏はじめ現地のボランティアのみなさま、有形無形の支援を与えてくださったsl-shockの関係者のみなさまに心から感謝を申し上げます。

(かさい・ゆみこ＝玉川大学専任講師)